

## 審査の結果の要旨

氏名 村松 灯

本論文は、ハンナ・アレント（Hannah Arendt, 1906-1975）の後期の思想に着目して、そこでの「精神活動」の政治性を明らかにしようとするものである。その際、後期アレントの「精神の生活」に関する思想の柱をなす思考、意志、判断のそれぞれについて、前期の思想の中心テーマであった政治活動論と架橋させつつ、検討が行われる。

第一章では、思考論が取り上げられる。アレントの論じる思考の特質と、その政治的意義が考察され、思考はそれ自体非政治的な精神活動であるが、まさにそれゆえに政治的であるという逆説性が示される。そうした逆説性から、精神活動が政治的实践とは異なる意義を有していることが示唆され、思考は実践に結びつくことによって政治的に意味のある活動になるのではなく、むしろ、政治的なものと直接に結びつかないことが重要なのであることが明らかにされる。

第二章では意志論が検討される。アレントにおいて、意志には人間存在の受動性と能動性をめぐる二重性の構造とそこに内在するアポリアが見出される。この意志をめぐる二重性とアポリアは、受動的な「始まり」と能動的な「始める」こととの間に存在するアポリアとして捉えられ、両者が架橋されるためには、他者という契機が、すなわち、私たちは常にすでに新しい「始まり」であるが、同時に、他者とともに「始める」ことへと導かれねばならないという契機が着目され、この点に、私たちが自由でありうることの政治的な条件が確認される。

第三章の判断論では、アレントの判断論にはアリストテレス主義的要素とカント主義的要素が並存していることが明らかにされ、この並存によって、共同体の「外部」の領域が生じ、「不在の人びと」のパースペクティブの再現前化が可能になるとされる。この「不在の人びと」とは第二章でも言及された「外部の他者」を指しており、この「外部の他者」の再現前化によって、いまだ見られ聞かれていないものへの応答がなされ、公共的世界の存続と更新における新たなパースペクティブがもたらされるという。この点に、アレントの判断論における政治性が見いだされる。

最後の補論では、アレントのハイデガー解釈が検討され、そこに、思考と意志の緊張関係という西欧哲学の伝統に共通のモチーフが見出される。こうしたモチーフはアレントにおけるハイデガー継受とその批判の双方に決定的な影響を与え、世界から退却し、孤独においてなされる精神活動としての思考と、世界で生じた出来事についての意見を形成する精神活動としての判断を彼女が厳格に区別していることにつながったことが解明される。

以上の検討を通じ、本論文では、アレント後期思想に、実践とは異なる精神活動に固有の政治的意義を見だし、そのことによって、政治的实践と直接つながらない政治的判断力の教育へ向けての理論的な示唆を抽出することが果たされている。これは近年の政治的シティズンシップ教育が直面する課題に重要な知見を提供するものとして、学術的意義を認めることができ、博士（教育学）の学位を授与するにふさわしいものと判断された。